

大学の理念について思う

九州大学大学院農学研究院 植物資源科学部門 山下 昭二

2004年4月国立大学の法人化が施行されて約4年が経過し、多くの先生方がその経過報告書の作成に追われる中、改めて、大学の理念について考えてみるのも、大学での教育研究活動の中とてか、く違和感、戸惑いを感じる事の多くなった一教員として必要であろう。国立大学の法人化と前後して、特色ある大学の創造をめざし、多くの大学からそれぞれの教育研究に関する大学憲章が提出された。多くの大学人および関連された方々の様々な角度からの議論、検討の中で確立されてきたこれら大学憲章の中に、現在の大学の抱える難況を克服し、将来にむけた展望を見出すことが出来るかもしれない。我々が学生であった1960年から70年当時、学生教員を問わず教育、研究という大学にとって最も基本的活動に常にその社会的位置づけが求められた。当事の時代背景、社会情勢から安易な社会連携は厳しい批判を受け、大学の基本的役割とは？の質問には必ず、真理の探究と知の創造およびその継承と伝達との答えが返ってきた。多感な時期をその時代に過ごした私には、何世紀にもわたり大学が存続して来た根源的理由は、本来この理念にあったのではないかと、今でも思えてならない。実際、日本の大学を代表するであろう東京大学の大学憲章の中の学術の基本目標には、「東京大学は、学問の自由に基づき、真理の探究と知の創造を求め、世界最高水準の教育・研究を維持・発展させることを目標とする。」と謳われ、京都大学の研究と教育に関する事項にはそれぞれ「研究の自由と自主を基礎に、高い倫理性を備えた研究活動により、世界的に卓越した知の創造を行う。」、「多様かつ調和のとれた教育体系のもと、対話を根幹として自学自習を促し、卓越した知の継承と創造的精神の涵養につとめる。」との記述がみられる。このことから判断すれば、現在においても大学を大学たらしめているのはこの理念であることに間違いのないようである。

然しながら、この基本理念が顕な形で記載された大学憲章はむしろ少ない。地方に位置する旧国立大学の理念あるいは目標を象徴するキーワードは、「社会連携」、「地域社会への貢献」、「地域産業の発展への寄与」等々である。これらのキーワードをふくむ大学の憲章や目標が圧倒的に多く、むしろ、こちらが大学の本来の理念と錯覚しかねないほどである。私には、大学の基本理念は前提として議論されつつも、各大学の個性や特色を色濃く出すために提案されたキーワードに思えるのだが、若い教員あるいは学生には本来の基本理念に対する認識は薄いかもしれない。本来の大学の基本理念（今では私が信じているだけかもしれない）が各大学の特徴や独自性を表す目標と必ずしも矛盾するとは思わない。しかしながら、両者の位置付けには、十分に検討の余地はある。後者は、前者と切り離された形で、ある意味において、安易な、評価、格付けを許すことになり、後者を対象にした、行き過ぎた評価システムは、本来の基本理念の実現において前提となる、自由な教育研究活動に重大な障害をあたえる可能性をもつ。もし、現代における大学の果たすべき役割や目標が特定されるなら、それは、日々、深刻化の度合いを深める環境問題、枯渇する資源、果てしなく激動する政治・経済情勢の中にあって、人類のみならず全ての生物を含む、地球社会とも言うべき社会の発展と共生の実現への貢献であり、あまりにも時間的にも空間的にも狭すぎる社会との関係強

化は、大学の存立基盤を脅かすことになりかねない。基本理念に基づく教育研究活動は時間的にも空間的にも無限の広がりもつ。又、持たねばならない。それ故、その時点時点での大学における教育研究の点検、評価目標の設定は時間的ダイナミズムの考慮のもとに慎重になされなければならない。現在の大学を取り巻く社会状況は、過去から現在までの時間的に累積された大学の社会貢献の所産であり、必ずしも、現在の大学の姿とは直結しない。むしろ、現在の大学の活動は時間を経た将来の社会に影響を与える。時節時節における大学改革はこの点を決して見落としてはならない。これに関連するもう一つの問題点は、理念なき試行錯誤である。我々、理系の人間は、信号検出システムをリセットし、実験系を完全に組み替え、新たにスタートする、という試行錯誤を必要に応じて何度でも繰り返す。このことにより、しばしば大きな成果が得られることも多い。大学における教育研究における方針の決定や改革においてはこのような試行錯誤は許されない。一度の試行の結果は次の試行のあり方を規定する。現在の教育研究システムのもとに養成される学生あるいは研究者は、時間を置いた将来の教育研究の担い手である。一步誤れば、異なるシステムで有意に成長した人材が異なるシステムを担わなければならない。我々の実験のケースでいえば、X線での検出システムを用いて赤外線を検出せねばならないような状況におちいることになる。前号で柴田先生が、旧教養部の廃止とその教育に与える影響について論じておられた。又、基礎教養教育の見直し、大学院組織の統廃合が矢継ぎ早に計画されている。これらの件についても、大学の基本理念に基づくことなく、その確かな位置付けがあいまいなまま実施されれば、関係する方々の苦勞も報われることなく、これらは悪しき試行錯誤に終わる危険性を孕む。

近年における、大学への批判は、一見、抽象的、非現実的にも見える、「真理の探求と知の創造と継承」という理念に大学および大学人の独断と閉鎖性を感じる事に起因しているようだ。この点に関して、私も含めて、長く大学にいる大学人はあまりにも鈍感であった点は否めない。然しながら、本来、この基本理念の追求は、個々の教育研究者相互の、また社会による恒常的かつ広範な点検評価抜きには実現し得ない。得られる個々の知性は、それを取り巻く環境社会との相互作用のもとにフィードバックし新たな創造をうみだす源泉ともなる。大学が時代を超えて創造的知性を生み、有意の人材を世に輩出してきた根源的理由はこの点にある。また、真理の探究と知の創造と継承という大学の理念は、理性をもつ人類固有の感性に立脚するものであり、その実現の場としての大学の魅力は今なお多くの学生、大学院生、教員がそこに学ぶことに意義を見出し、優れた叡智を結集する源泉でもある。大学における一つの大きな役割が有意な人材養成による社会への貢献であるとするなら、その実現には、個々の大学が社会にとって魅力ある大学であると同時に、そこに学ぶ学生、大学人一人一人にとっても魅力ある大学でなければならない。

大学の法人化からやがて5年。今、大学のあり方が点検される時期にあたり、再度、大学の理念について議論をつくし、すべての生命社会の発展と共生に資する新たな大学像を一日も早く確立したいものである。